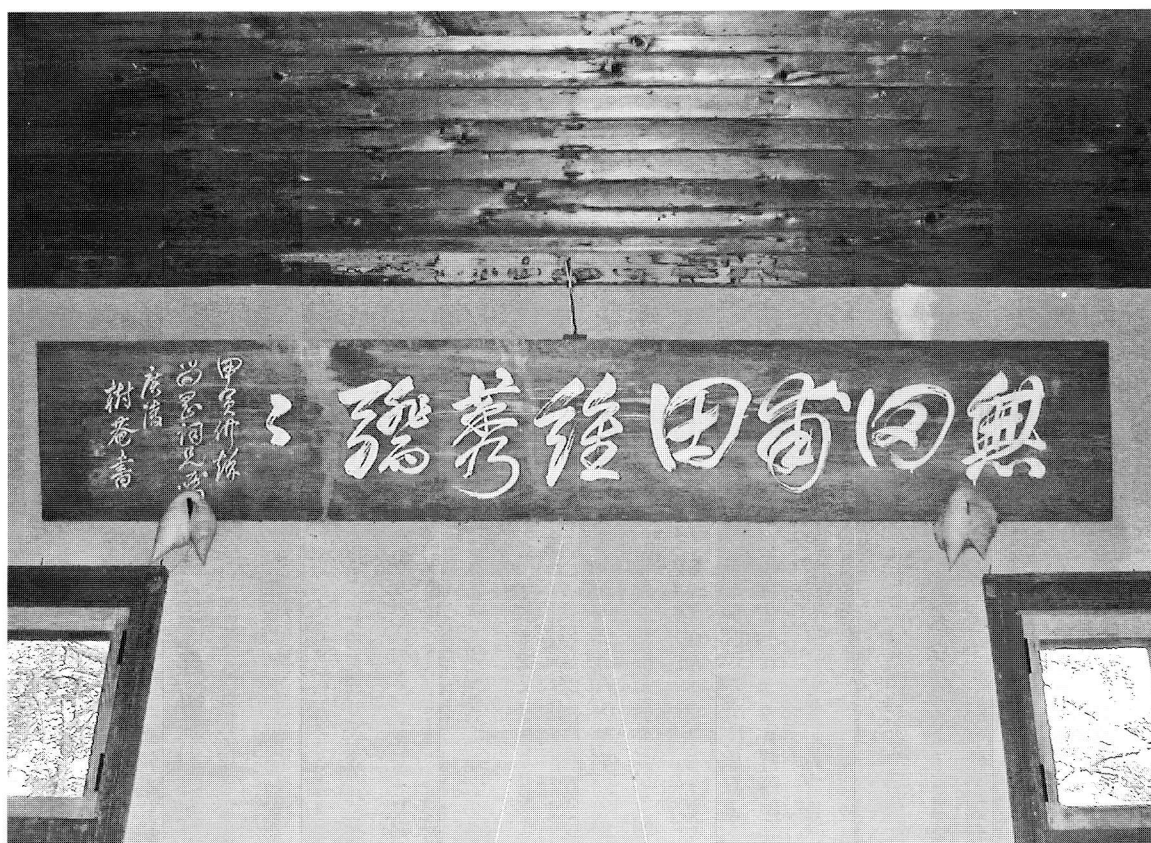


沼津市

# 明治史料館通信

2008.10.25 (季刊 年4回発行) Vol. 24 No. 3 通巻第95号



「無田甫田維莠驕々」額 (社会福祉法人北海道家庭学校提供)

江原素六が留岡幸助に送った言葉を額にしたもの。北海道家庭学校の礼拝堂に掲げられている。

江原素六とその周辺〈49〉

## 家庭学校と江原素六

家庭学校は、留岡幸助が明治三二年(一八九九)一月二三日東京巢鴨に創立した感化施設である。江原素六は留岡のよき理解者・協力者であった。

留岡幸助は元治元年(一八六四)、備中国高梁(現岡山県高梁市)に、吉田家の次男として生まれ、すぐに留岡家の養子となった。一六才で洗礼を受け、その後、明治一八年、同志社英学校別科神学科邦語神学課程に入学、新島襄の教えを受けた。

卒業後、丹波第一教会で牧師となり、定住伝道を始める。明治二四年、北海道市来知(いちきし)の空知集治監の教誨師となった。そこで、監獄からだけでは人を救えないことに気づき、囚人を通して監獄に入る前の保護が大事と考え、感化事業を志すようになった。二七年から三〇年にかけてアメリカに留学、コンコルド感化監獄で実習、その後、エルマイラ感化監獄ではプロ



留岡幸助  
『留岡幸助著作集 第四巻』より

ツクウエーに直接指導を受けた。帰国後、国内で感化院の設立のために奔走し、家庭学校を設立した。江原素六と留岡幸助が知己となるきっかけは、明治二十九年（一九一六）七月下旬、留岡が牧師松井文弥とともに丹波に伝道に赴く途上、江原が自由党の遊説員として四国に赴く途上であった。前日の強雨のため、東海道鉄道が水害のために破壊され、加太（現三重県亀山市）から柘植（同県伊賀市）までをガタ馬車か徒歩で行かなければならなくなり、江原と留岡、松井、古谷久綱（元伊藤博文の秘書官で当時国民新聞の記者）の一行は徒歩で峠を越えることにした。この時、当時五四歳で最年長の江原素六が四人のうちで一番に峠に登り、老齢ながらの健脚ぶりに留

岡は驚いたという。

家庭学校は三九年六月に組織を変更して財団法人となった。江原は法人になると同時に理事に就任し、亡くなるまで務めた。江原は理事会の開会毎に万障繰り合わせて出席した。出席しても談論風発するということもなく、「只チツトして」席に在るだけであったが、江原が列席しているということになんとかく会は緊張して議事が進んだという。いわば江原は理事達の先生のようなものであったと留岡は回顧している。

大正三年（一九一四）八月二四日、家庭学校が北海道上湧別村字社名淵（現遠軽町留岡）に分校と農場を設置した。留岡は北海道への出発に先立ち江原の元を訪れた。江原は「留岡君僕は貧乏であるから餓別にすべきものを持たぬ、之を餓して君の北海道行きを祝したいと思ふ」と言つて、「無田甫田維莠驕々矣」という詩経の一節を留岡に書き遣り、手に余る田を作ると、莠が茂つてどうにもならなくなるといふ意味だ。仕事を遣り散らかすと纏まりがつかなくなる、

手に適った仕事をすればよいと解説した。留岡は、自分の弱点をよく知つたうえで江原の餓語をありがたく思い、北海道に行くときに、能筆で知られる網走監獄の大谷典獄に揮毫してもらい、長さ二間、幅二尺の楡の板に彫刻させて板額とし、礼拝堂が建築されたあかつきにはその正面に掲げるつもりで、自分の寝室兼書齋である八畳間に掲げた。この板額は現在も北海道家庭学校の礼拝堂に掲げられている。

大正四年夏、江原は北海道の農場を訪問した。江原は開墾地や厩、牛舎、礼拝堂などを見て回り、「豚の飼育方は斯うやるべきじゃ、開墾は斯くすべきじゃ、馬はかやうに御すべきじゃ、農業開墾は斯様にやるべきじゃ」など細かい実際的な話をしたという。農場員は江原から宗教、道徳、教育などの話を聞くことを期待していたところで、江原の口から豚の飼育法や農業開墾のことまで聞くとは思っていなかったのが非常に驚いたという。

江原は、農場を去るにあたり、

「之で私も安心した。実は家庭学校の農場開かれてより、東京辺では色々の噂が立つ。留岡は素人の癖にあのやうな大面積の土地の払下げを受けて開墾をやつて居るが失敗せねばよいがなど、色々の噂がある。其時私は思ふた。自分は家庭学校の理事でありながら、一度も実地を見ずして相談に与つて居る。世人が色々の事を言ふて居るのに、其れは君方が間違つて居るとも間違つて居ないとも云ふことの出来ぬのは、実は自分に取つては頗る苦しいことである。故に一度見とかなくは責任が済まぬと思つて来て見た。見ると中々善いところじゃ、之れらな大丈夫、折角勉強してやつて呉れ玉へ、必ず成功するに違いない。」と言つて、留岡らを励ました。留岡は江原を「責任觀念の強い方であると思つた」と回顧している。

（参考文献）同志社大学人文科学研究所編『留岡幸助著作集』第三巻、第四巻

※本稿執筆にあたり、石割憲一氏よりご教示を得た。記して感謝の意を表する次第である。

シリーズ  
沼津兵学校とその人材

85

## 小田川全之と安全第一

現在、工事現場や工場などで当たり前のように目にする「安全第一」という標語は、二〇世紀初頭アメリカの工業界で提唱されていたSafety Firstという概念が日本に取り入れられたものである。その最初の紹介者こそ、旧幕臣の子で沼津兵学校附属小学校出身の工学博士小田川全之（一八六一〜一九三三）その人である。



小田川全之（小田川清氏提供）

「安全第一」標識  
(NPO法人足尾歴史館所蔵)

長、古河合名会社理事などをつとめた。足尾銅山では、労働者の「知育徳育を高めたい」という趣旨で雑誌『鋳夫之友』を発行、大正四年（一九一五）一月その付録として『安全第一』という小冊子を配布したが、「安全第一」という運動が日本に広まるきっかけとなった。彼は、その数年前からSafety Firstについてアメリカから情報を得ていたが、日本語に直すにあたっては「安全主義」「安全本位」「安全第一」などを使用していた。

小田川により足尾で始まった動

きは、やがて工業界や交通業界などに広がり全国展開を見せ、大正六年（一九一七）二月一日安全第一協会が創設されるに至った。

会頭は通信次官内田嘉吉。小田川は賛助会員の一人にすぎなかったが、四月三日の第一回総会では先駆者の名誉として「工業と安全第一」の題で講演を行った。また、同年四月から八年（一九一九）三月まで刊行された月刊の同会機関誌『安全第一』には、彼が足尾銅山で配布した『安全第一』の一部が二回にわたり転載されている。

小田川の人脈、旧幕臣・沼津・クリスチャンという共通点によるものである。安全第一協会には江原素六も関わっている。大正六年六月発行『安全第一』第一巻第三号に「冒険にも安全第一あり」という短文が載ったほか、同年一月三十一日東京神田の東京商業学校を会場に開かれた第二回総会では「安全第一雑感」のタイトルで記念講演を行っている。その講演内容は、禁酒運動に取り組んでい

たためもあり、旧幕時代の体験談、聖書や春秋左氏伝からの引用を含

め、酒が安全観念に及ぼす害悪について述べたものであった。

なお、大正七年六月時点で安全第一協会の会員数は三九二、うち静岡県は緒明圭造・花島信一・曾根房吉のみである。花島信一は、練乳工場を経営した三島の素封家花島兵右衛門の子で、小田川にとつては甥（姉の子）にあたる。同家もクリスチャンの家である。

安全第一を導入した小田川の動機は、労働者の管理・監督、ひいては会社経営のためという資本家側からする発想だけではなかったように思える。労働組合の結成を推進した佐久間貞一、社会問題に取り組んだ島田三郎、鉄道青年会などを通じて労働者の修養に力を入れた江原素六ら、労働者の地位向上に意を注いだ旧幕臣たちは彼にとって身近な存在であった。江原・島田は沼津兵学校時代の恩師・先輩であり、クリスト教徒としても同様であった。その根幹には人道主義があった。

〈参考文献〉『安全第一』復刻版・全四冊・別冊（二〇〇七年、不二出版）  
(樋口雄彦)

お知らせ欄

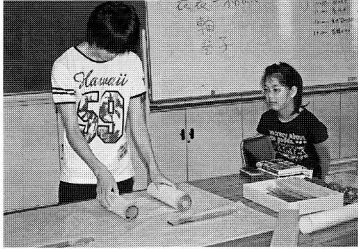
「夏休み企画」実施報告

＊戦時中のくらしを体験しよう

8月6日(水)、小学4～6年生32人が参加しました。今年には佐藤友哉氏から紙芝居「白旗の少女」を交えた戦時中のお話を聴きました。また、金岡婦人学級の方々のご協力をいただき、すいとん作りをしました。初めての経験に戸惑いながらも、戦時中の苦勞の一コマを体験しました。

＊1日学芸員体験講座

8月8日(金)、中学生2人、高校生1人が参加しました。午前中学芸員の仕事について講義を受け、収蔵庫を見学。午後は実際の資料を取り扱う実技体験をしました。



「巻物」の取り扱い体験中!!

＊平和を考える戦争史跡めぐり  
8月7日(木)、中学生 13人

9日(土)、親子 23人  
10日(日)、親子 24人

沼津市内に残る戦争史跡をバスでめぐり、風化しつつある戦争を思い起こし、平和の尊さについて考える機会となりました。9日には東京都立沼津戦時疎開学園の同窓会の方々が、我入道に残る疎開学園跡(現文化財収蔵庫)で、疎開時の生活の様子をお話してくださいました。また、今回はテレビの夕方放映されました。

＊こども土曜塾「むくろじ」開催

5月から12月の毎月最終土曜日、小学生以下の子どもを対象に竹細工を楽しむ講座を開催しています。市教委生涯教育課の「おしえて名人」に登録されている方々を講師にお招きし、竹を使った手作りおもちゃを作り遊びます。残すところあと、11月29日(土)、12月20日(土)の2回。いずれも13時30分から参加費無料、お申し込み、持ち物も不要です。お気軽にご参加ください。

学芸員実習

8月27日から9月10日まで、大学で博物館学芸員資格取得を目指す学生5人が実習をしました。ぬましんストリートギャラリー(大手町)での館蔵資料展、教育普及事業(古文書講座ほか)の補助、拓本取り、資料整理など、実践的な実習となりました。



ストリートギャラリーでの展示作業風景

ぬましんストリートギャラリー

館蔵資料展

「沼津兵学校附属小学校で

学んだ人たち」

9月2日(火)から28日(日)、大手町の沼津信用金庫本店で開催しました。館蔵資料を、館以外でもご覧いただく機会として開催し、今年で5回目になりました。展示作業には、学芸員実習生も参加しました。

古文書解読入門講座の実施

9月～10月の毎週日曜日5回にわたって、初めて古文書に触れる人のための講座を開催しました。今年には平沢村の「御仕置五人組帳」(江戸時代)をテキストに、講師の武田藤男氏(元明治史料館嘱託)の指導で、ミミズがのたくったようなくずし字を解読するコツや、楽しさを学びました。

くん蒸実施のため休館します

大切な資料を虫やカビの害から守るため、館内のくん蒸作業を行います。そのため、以下の日程で臨時休館します。

(休館日)

11月10日(月)～19日(水)

年末年始の休館について

12月29日(月)から1月3日(土)まで休館します。

沼津市明治史料館通信 第95号

編集 沼津市明治史料館  
発行

〒410-0051 沼津市西熊堂三七二一  
電話 〇五五九二三三三五

FAX 〇五五九二五三〇一八  
http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/sisetu/meiji/index.htm